

平成 27 年度 第 2 回社会教育委員会議概要

- 1 日 時：平成 27 年 8 月 20 日（木）10:00～12:00
- 2 会 場：小田原市役所 議会全員協議会室
- 3 委 員：木村議長、中村副議長、有賀委員、角田委員、笹井委員、高橋委員、土田委員、西村委員、深野委員
- 4 職 員：安藤文化部副部長、杉崎文化部副部長、友部生涯学習課長、大島文化財課長、古矢図書館長、石井青少年課長（事務局）
大木生涯学習担当副課長、高橋生涯学習係長、渡邊主査、田中主事
- 5 傍聴者：なし

6 概 要

1. 委嘱状交付

安藤文化部副部長から西村委員に委嘱状を交付した。

2. 挨拶

安藤文化部副部長が挨拶をした。

3. 委員紹介及び職員紹介

名簿順に委員に自己紹介していただき、次に職員が機構順に自己紹介した。

4. 報告事項

(1) 社会教育事業の結果及び予定について（平成 27 年 5 月～11 月）

資料 2 に沿って、順次各所管の社会教育事業の結果と予定について報告した。

【有賀委員】 図書館の事業の中で、4 ページの 7 月 23 日から 4 回にわたって実施する 1 日図書館員という事業があるが、延べ何人が参加したのか。

【図書館長】 1 日図書館員は、一般公募の小学生に参加してもらっており、この期間で延べ 19 人の参加があった。これ以外にもインターンシップや、今はちょうど小田原ビジネス高校の生徒さんが来ているが、大学生の実習生も来たり、夏休み中実習の受け入れは多い。

【有賀委員】 夏休み限定の事業か。

【図書館長】 年度を通して学校からインターンシップの申し出はあるが、一般募集事業ではないのでこれまで報告してこなかった。しかし、図書館の体験はかなり件数が多いので、次回の会議で年間どれくらい受け入れているのか報告したい。

【中村副議長】 ほかの地域の社会教育委員をしていて目から鱗が落ちたと思ったことがあるのだが、図書館というのは来てくれることを想定してやっているけれども、せっかく小田原はまちじゅうがキャンパスということなので、来て

もらうのではなく、出ていくというか、いろいろなところに図書を置いているという仕組みを作っていけると良いのではないかと思った。その辺りについては笹井委員が詳しいと思うが、図書館に来てくれる人たちではなく、来ない人の対策というか、地域にさまざまな小さな図書館があるような感じになっていく。図書館とまではいわなくても、たとえば喫茶店とかに沢山の本が置いてあり、ここも小田原の図書館、という感じに位置付けるのも面白いと思う。

【笹井委員】 今、読書が非常にブームになっている。活字離れが言われて久しいが、本を読むことや読書と対話を結び付けて、自分の人生を良くしようということがすごく高まっている気がする。それは本をしっかり読むということのほか、本を話題にして会話したり共感しあったりする、そういうことが今の時代に求められているからだと思う。そのため、図書館の運営も徐々に伝統的な図書館像から、もう少し踏み出した形が望まれているのだと思う。そういう意味ではいろいろな自治会が施設を作ったりしているので、そこに雑誌や新聞を置くとか、あるいは図書を貸し出すとか、そういう公的な施設をうまく生かす工夫とか、あるいは本を大事にしている民間施設や個人のお宅の一部の本を、みんなに開放してもらうようお願いする、ということも面白いと思う。伝統的な図書館というのも大切だが、もう少し文化的な楽しみに使うという流れの中で、図書館の運営を一步でも二歩でも進めていくと、小田原市全体がキャンパスという流れに馴染むのではないかと思う。

【図書館長】 貴重なご意見をありがとうございました。今ご発言いただいたことも含め市民のかたの活動が大切になってくると思っている。今まで文学のまちづくりという事業の中で、川崎長太郎をはじめ小田原の文学者等を取り上げ、講演会を中心とした事業を“西海子サロン”という名称で市民のかたと協働でやっていたが、今年度はこの枠組みを変えようと30代くらいのかたと小田原短期大学の先生達とを中心としたグループで検討しているところで、その中では文学サロンというような形で、笹井委員のご発言にあった、本をキーワードに対話できるようなサロン活動をやりながら、もう少し外に向けて読書を発信するような事業を企画していこうという動きがある。次回の会議ではその辺りの話について内容が詰まってきたところも報告できると思う。今、民間でもコミュニティスペースでブックカフェ的な活動をしているかたもいるので、そういった人たちとも連携や情報交換をしながら進めていきたいと思うし、出ていく図書館についても、現在図書館体制を考えている中で参考にさせていただきたいと思う。

5. 協議事項

(1) 答申について

生涯学習課長より資料2から資料4に沿って説明をした。

【木村議長】 ではまず、「1. 地域における学びの場を考えるにあたっての要因について」、及び「2. 社会教育の役割と目指すべき学び」について、20分ぐらいで議論していきたい。その後、「3. 地域における学びの場のあり方」及び「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」について、それぞれ20分ぐらいで議論したいと思う。

【深野委員】 「2（1）社会教育の担う役割」の1つ目に“人と人との絆”とあるが、東日本大震災後、絆という言葉が非常によく使われるようになってきたが、私は絆という言葉があまり好きではない。何を言っているのかよくわからず、きれいごとで済ませている気がしてならない。参加者が少ないとか、動機付けのために楽しめるものをするとか、それはそれで必要だと思うのだが、絆というか、本来何のためにこういうことをやっているのか、どういう人を教育したいのかというところが表現の中に抜けている。書かれていないだけで考えとしてはあると思うのだが、例えば、危機的な状況において人のために自分の力を尽くす、そういう人材を育てるため、等とるのであれば、絆の意味がより具体的なイメージになるが、その辺りの内容が絆という言葉でさらっと流れてしまっているので、答申全体でイメージが伝わるように書いていくと良いと思う。

【中村副議長】 深野委員のご発言は全くそのとおりで、絆という言葉でもそうだが、言葉の定義が少し足りないと思う。学びの場のあり方についてということだが、学びをどう捉えるかをはじめに相当きちんと書く必要がある。多くの人は学校教育の影響が強いために、学びというと勉強することと思いがちだが、学ぶことは生きること、というようなことを最初に定義した方が良いと思う。

また、「2. 社会教育の役割と目指すべき学び」では、社会教育の役割ということで教育のことが書かれていて、「3. 地域における学びの場のあり方」では、地域における学びということだが、学びの主体は学習者であるから教育と学習の違いをもう少し明確にすることが大事で、そうすると先ほどの絆というところも少し具体的に書けるのではないかと。

特に2と3のつながりがよく分からないので、ここを明確にする必要があるのかなという感じがする。

【笹井委員】 2点発言したい。1点目は絆についてだが、私は信頼関係という意味だと理解している。信頼関係を広めることや深めることが大切で、なぜそうかと言うと、知識や技術を身につけることもそうだが、いろいろな人との付き合いの中で、自分が気がつくことが大切で、そういう学習は社会教育でないとなかなかできないと思う。そのため、気づきの中でお互いの良さを理解しあい信頼関係を深めることはまさに社会教育が地域をつなぐことにつながると思う。絆という言葉は抵抗感があるが、信頼関係という言葉に言い換えるとしっくりくると思う。

2点目は質問なのだが、小田原市に関わらせてもらうようになって気に

なったのだが、小田原市には地区公民館がたくさんあるが老朽化しているものもあり、これをどうするのか教えていただきたい。個人的にはこれだけの数の地区公民館を自治会が管理していることは地域の資源であり資産であると思うが、恐らく古くなっており、それを建て直すのか統廃合をするのか等いろいろあると思うが、そのことと、これからの学びの場は深い関係があると思うので、今の段階で今ある地区公民館をどういう方向に持っていか、もし考えがあれば教えていただければと思う。

【木村議長】 事務局も各地区の地区公民館の中身まではわからないと思うので私から説明させていただきたい。各地区の自治会員から何十年も建替え費用を集めている地区もある一方、地区によっては複数の自治会で1つの地区公民館を持っているところもあり、そういうところは意思疎通がうまくいかないで、今の地区公民館を補修しながら何とか維持している等、地区によって異なる。1軒につき年間500円とかで建替え費用を何千万と貯めてきたところもあるが、資材の高騰等によって集めたお金では不足、どうしようかと悩んでいる地区もある。生涯学習課から建替え費用の補助を受けられるが、131館もありなかなか順番が回ってこない。そのため、各地区には予定があれば早めに申請をするように言っている。自治会が中心になって何とか地区公民館を維持しているが、一番困るのは自治会員の減少で、会員が減ると収入も減ってしまう。市の人口が減っているなかで、会員数を増やさなければならず、そういうことも含めて今後考えていく必要があると思っている。

【深野委員】 私のいる寺下自治会では、地区公民館のほかに自治会の集会所を地域に持っている。自治会の集まりも集会所で行っており、1つの拠点と言える。こういった施設を含めるともっと数が多くなるのではないか。しかしこれは昔の人がお金を集めて建てたものなのでとても古く、地震が来たら心配である。そういうところも含めてどうしていくか考えていけないといけないと思うが、考え方として、いわゆる生涯教育の場としてだけでなく、防災拠点やケアの拠点としてどう考えていくのか。これからは大規模な老人施設も新たに建てられないと思うので、地域ごとにやっぴいこうという動きやケアタウン構想のなかで、地域拠点をどうしていくかとかその辺りのことを行政の縦割りではなく横断的に考えないと、個別には難しいのではないかと思った。

【土田委員】 地区公民館については、豊川地区でも建て直しや修理をすると言っているが、それ以前に建物の土地は市がすべて管理しているわけではない。豊川地区の地区公民館の土地は、寺の所有地が1か所、神社の所有地が2か所、個人の所有地が1か所あるが、寺からは建て直しを拒否されているため簡単な修理しかできず、建て直しはできない。個人の所有地は、現在の地主が次の代に移ったら継続して土地を利用できるかわからないと言っている。神社の所有地に建つ地区公民館についても、市が建て直すには地主や

氏子総代会が了承しないと無理な話である。その辺りの整理も含め、土地の権利についても書いてもらいたい。

【生涯学習課長】 地区公民館は市の施設ではないので、建て直しは基本的に地域のかたが自主的にやるのが大前提であり、市はそれに対して補助を出している。

建設年代がずれていたら良かったのだが、多くの地区公民館が昭和30年から40年代に建てられたので、建替えの必要性もまとめて出てくる。市が直接やるのではなく、地域の中でそれぞれ予定を組んでやっていただいているという状況であることをご理解いただきたい。

【中村副議長】 今話を伺っていて思ったのだが、「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」の4つ目で、“学びの場については、地域コミュニティ組織の活動の場と一致させていくことが大切とある”とあるが、もちろん地域コミュニティ組織と一致していけば、つながりはできやすいかもしれないが、やはり地域差がある。また資料4の右側のイメージ図は理想であるが、小田原市の場合は地域によって広さも全然違うし、住民の文化や特性も違うので“一致させていく”というのは難しいかもしれず、“活用していく”くらいが良いのかなと思う。

また、社会教育以外の施設を活用していくことが大切であるし、この場にも学校教育関係者のかたがいらっしゃるので、学校教育も活用することをどこかに書いてもらえると良いと思う。

【木村議長】 今の箇所だが、深野委員から指摘があった「2. 社会教育の担う役割」については、“絆”を“信頼関係”という言葉に変えるという意見があったので直してもらいたい。

「1. 地域における学びの場を考えるにあたっての要因について」、「2. 社会教育の役割と目指すべき学び」については、この内容で良いか。また「3. 地域における学びの場のあり方」及び「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」については、これから議論してするという事でよいか。

【委員】 （「異議なし」の声あり）

【木村議長】 それではこれから「3. 地域における学びの場のあり方」及び「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」について意見をもらいたい。

【中村副議長】 「3（2）学習へのアクセスを広げる」の【学びの場】の2点目は重要だと思うので、この辺りがもっと丁寧に書かれた答申になると良い。例えば保健所が行う乳幼児健診の受診率はとても高い。保健所の事業なので社会教育ではないと言えばそれまでなのだが、そういうところを活用すると、いろいろな教育ができるかもしれないし、先ほどケア施設と言ったが、そういうものを生かしていくことも大切だと思う。防災についても意識が高くなっていると思うので、防災も教育委員会系ではないかもしれないが、生かしていくことも大切かもしれない。

また、神奈川県の水源のある相模原市では、水道局がさまざまな講座を開催している。それらも地域の特性を生かした教育としてすごく良いと思うし、小田原市が進めているまちじゅうキャンパスも教育委員会だけでやるものではないので、その辺りをもっと言えると良いと思う。

【笹井委員】 社会教育施設と言った場合には大きく2つに分かれると思う。1つは専門性を持った施設、例えば博物館や図書館や水族館、歴史資料館等専門性を持っているというか個性的な施設であり、美術館や音楽ホール等、ある種の個性をもっている施設である。もう1つは、多目的というか無目的な施設で、特に大きな目的に資するものでなくてもわいわいと人が集まれる場、昔でいうと縁側のような場という施設である。

行政の立場からすると、目的がはっきりした施設の方が議論しやすいし、それはわかるが、小田原市も含め今の日本の社会は昔の縁側のような場がすごく減っている。小田原市にはせっかくこれだけの施設があるので、縁側の復活は難しいが、それに代わるものが地域で作れないかと思う。

たとえばイギリスのPUBはPublic Houseの略で気軽に集まってお酒を飲みながら話す場のことだが、気軽に集まって話したり議論したりできる場が地域にはすごく少なくなっているけれども、やはり大切である。

専門性を持つ施設は、それを充実させながらそこに住む人の生活や人生を豊かにするような事業をやってもらおう。一方で、みなが自由に集まって話し合ったり議論したりするような場を作っていくことが、地域での信頼関係づくりをはじめ、地域の祭りや活動等の充実につながると思う。一緒に議論するのは難しいし、文章に明記しなくても良いが、そういうことを念頭に置いて、少し整理しながら書くと良いのではないかな。

【木村議長】 社会教育と地域コミュニティは一体である。一番良いのは、社会教育委員が各地区にいてくれることである。コミュニティができていない地域に行き、こういう方法があると示してやると各地区でもできるのではないかなと思う。笹井委員のご発言にあったように昔は縁側で集まっており、富水地区ではそういうのをイメージしてお茶会を行っている。地区によっていろいろなやり方があるが、お年寄りが集まってお茶を飲みながら話をする事業を地区公民館を利用して各地区でやっている。そういったことが市全域で広まると良いと思うが、地域差があるのですべての地区でやるのは難しい。しかし各地区で少しずつでも広まると、お年寄りの居場所づくりみたいなかたちで地区公民館が利用されると思う。ほとんどの地区公民館では祭り、囲碁、カラオケ、卓球、敬老会等の活動が行われており、毎日場所が空いているわけではないし、また地域差もいろいろあるが、そういうことを考えながらやっていくしかないと思う。

行政側にこうして欲しいと押し付けるのではなく、自分たちで考えないと長続きしない。自分たちで良い方法を模索しながらやっていかないと長続きしないので、そういう事を考えながら、皆さんが率直に思っている学

びの場のあり方について、意見を出してもらいたい。

- 【角田委員】 今の木村議長の話とは少し違うのだが、富水地区には城北タウンセンターいずみがあり、そこはいつも赤ちゃん連れの母親が何人かいて情報交換等をしており、また自由に使えるスペースでは高校生が勉強しており、階段近くの談話コーナーにはテーブルや自動販売機が置いてあって、お年寄りが集まっている。そういう感じのところを笹井委員がイメージしたのかなと思った。タウンセンターいずみは少し狭いのでそれぐらいしか使えないが、自由に使える、そこが良いところではないかと思う。最初にできたマロニエはそれよりも広いのもう少し自由に使えると思うが、高校生や小さい子が大勢入れるのかわからない。やはり自由に使えるコーナーがあると、良い施設（場）になるのかなと思う。
- 【深野委員】 「3. 地域における学びの場のあり方」を読んでいて、じっくりこない部分があったのだが、「(1) 学習意欲を喚起する」と「(2) 学習へのアクセスを広げる」は方法論や条件が書かれており、「(3) 郷土愛を育てる」「(4) 公共心を養う」「(5) 次世代を育成する」は目的となっているのかなと思うのだが、方法論と目的とが並列で書かれているので、ストーリーとして違和感があった。文章をきちんと読むと(3)(4)(5)も方法論が書かれているかもしれないが、少なくともタイトルが目的を表現しているのを整理して書いてもらえるとよい。逆に、例えば(1)(2)を後ろに持っていき、(3)(4)(5)を(1)(2)の方法で実現する、という書き方はどうかと思った。
- 【中村副議長】 ご発言のとおりで、「2. 社会教育の担う役割」と「3. 地域における学びの場のあり方」のつながりがわからないので、そこを明確にしないと難しいのかなという気がする。また3には主語がないので、誰がやるのかわかりにくい、主語を書くとも方法論ではなくなってくる。その辺りの流れをどうするかは私も悩ましいところである。
- 【生涯学習課長】 「3. 地域における学びの場のあり方」については今回の時点ではまだ主語が明確に出せなかったもので、これから考えたい。
- 【中村副議長】 主語はただ主語を置くかどうかだけではなく、行政と市民とのかかわりをどう捉えるかということで、すごく重要な部分である。教育と学習をどこまで教育としてやるのかということが、重要なところだと思う。
- 【有賀委員】 学校教育の立場から、「3(1) 学習意欲を喚起する」の【仕掛け】“楽しめるような仕掛けを考える”について、先ほど地域の職場体験として1日図書館員の話があったが、やはり面白い仕掛けが必要だと考えている。現在、中学2年生を中心に職場体験を行っていると思うが、地元の小学校では小学6年生が地域の商業施設に職場体験に行かせてもらっている。職場体験には親が見守りボランティアで参加したり、御礼の挨拶等に行かせてもらったりするので、それらを通じて地域との連携がとられていると思う。図書館をはじめ地域の施設の受け入れ態勢を充実させて協力を得ること

が必要であると思う。

また、楽しめる仕掛けということで、8月1日、2日にはキャンパスおだわら人材バンク主催の「夏休みこどもおもしろ学校」を見学した。絵本作りやサンドアート体験のほか宿題に役立つような書道教室等もあり、大盛況であった。机上の学習だけではなく、体験を通した学びの必要性も感じた。地域の協力体制がありがたい。

【木村議長】 それでは次に、「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」について意見があればお願いしたい。

【中村副議長】 もしかしたら、全体的にこの枠組みで考えないほうが良い気がしてきている。「3. 地域における学びの場のあり方」では【仕掛け】と【学びの場】が書いてあるが、仕掛けというと教育だと思うが、では学びの場は何なのかと言われるとよくわからない。

例えば、笹井委員のご発言であったように専門施設のある教育という部分と縁側的なものが大切である。角田委員のご発言のように、地域には良いところ（場）もあるわけで、そう考えると、教育として専門的にやる部分と地域でやる部分を少し分けて考えたほうが良いのかなという気がしてきた。なぜそう思ったかと言うと、主体をどちらにするかというところが気になったのと、「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」の4つ目で“地域コミュニティ活動の場と一致させていくことが大切である”と言っているが一致させるには地域差がありすぎて、その辺りをどう出していけば良いのか少し難しい気がするからである。

【木村議長】 今、中村副議長のご発言にあったが、1つの答申の中に行政の役割と地域の役割を分けるのもおかしいだろうし、一方で今度は地域の中にどこでも良いから拠点を持っていこうとなると、地域差があるので、なかなかうまくいかないと思う。そのあたりを1つの枠の中に作っていくとなると違和感というか、できないことを書いても仕方ないし、だからといってそれを抜かすと何もなくなるし、そのあたりが少し難しいのかなと感じる。

【深野委員】 資料4のイメージ図は初めは分かりやすいと思ったが、中村副議長の話聞き、これは拠点となる施設のマークがすべて違うので、そうなってくるとそれぞれ地域によって性格や、やれること、地区の人の関わりかたも異なってくると思うので、それをどうやって調整するのかと改めて思った。イメージは分かりやすいが、もう少し掘り下げないと具体的などころにつながらない。課題が多すぎて概念だけで終わるリスクがあるのでとは感じた。

【木村議長】 現実化するかは別として、一番良いのは小学校が各地区にあるので、小学校の空き教室を使う案である。最終的には拠点は小学校が一番良いと思う。これから少子化が進んで空き教室が出てくるとなると、防犯上等の面で教育委員会はなかなか首を縦に振らないと思うが、一番簡単にできる拠点づくりは小学校の教室を開放することだと思う。ただ、いつもそこに行くと使える場があるのが理想だが、例えば夜の会合があるとセキュリティの間

題等が出たりするので、話はしているがなかなか進まない。しかし、しっかりした拠点がないと、皆ふらふらしてしまう。それを小田原市に求めても（整備が難しいのは）わかっていることなのでそれ以上のことは言えないが、やはり地区ごとに拠点を作らないと自分たちで動きが取れないと思う。その辺りのところをこれからやっていきたいと思う。

【中村副議長】 「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」は社会教育施設の今後の方向性ということで、拠点についていろいろと書いてあるが、「2（2）目指す学び」の“人や活動をつなげること”や“人を育てる”ためのコーディネーターを養成する等、ソフトの部分をこっちにも入れる必要があるのではないかという気がした。

【高橋委員】 拠点という話が出たが、拠点とはなんだろうと思った。今までの話から、人が集まりやすい場所とか防災関係の物が置いてあるとか、何をもって拠点とするのかが分からないと思った。必要な機能についても、行政が必要と思っている機能と地域が必要と思っている機能は違うと思うし、そこが地域によって違いが出てくると思う。

集まりやすい場と言うのなら簡単にできると思うが、集まりやすいだけでは足りなくて、そこに何かがないと集まらないわけだし、拠点で中心になる人は誰だろうかと思った。拠点とは何か、をもう少し整理や議論する必要がある地域の中でもあるのではないかと思った。

また地区公民館がこれだけあるのもすごいと思う。自分が住んでいるところは地区公民館がなく、集まる場が限られている。そのため、小学校や、藤沢市は「地域市民の家」や市民センターがあるが、それぞれ役割が違う。「地域市民の家」は部屋があるのでいろいろなサークル団体が借りて活動している。

市民センターには図書館や運動のできる小さなホールがあったり、住民票の窓口等もあるので集まりやすく、また祭り等も開催される。しかし、盆踊りや夏祭り等大きなイベントが開催されるのは小学校である。あまりたくさん施設がないから使い方が決まっているが、小田原市には多くの地区公民館があり、さらにそこで歴史的なものも保管しているということだが、この歴史的なものの保管は世代が代わったらどうするのか、その部分を市としてどう考えるのかといった部分等、答申に含まれるかわからないが、付随していろいろな問題が出てきてしまうと思った。

【中村副議長】 そのとおりだと思う。場所があることは大切だが、場所があっても場所だけでは人はつながらないかもしれない。仕掛けやソフトをどうしたら良いのかもっと考えないといけないし、書き足さないといけないかなと思う。

【高橋委員】 昔は公園に行けば子どもが遊んでいて、小さい子をつれた親の姿をよく見たが、最近公園で遊ぶ姿を見なくなっている。どこに行っているのかと言えば、子育てセンター等の利用者が年々増えていると聞いている。そこには人が集まるだけでなく、何かあったときに相談に乗ってくれる人がい

る。人という部分が1つ、つながりの部分だと思う。

子どもの場合だが、引きこもりやなかなか外に出られない子も、何か自分に興味があることがあれば外に出られると思う。ものだけではなく、人が嫌だと言いながら、逆に人を求めているところもあるので、人によって違うが、やはり場だけでなく人は大きいと思う。

【中村副議長】 すると「2（2）目指す学び」に書かれていること、つまり人づくりがすごく重要になってくる。

【笹井委員】 拠点は必要だと思うが、例えば次世代育成等、子ども達を育てる拠点は学校であるが、地域の歴史を学ぶ拠点はまた別の施設であったり、美術館はアートや芸術活動の拠点となる。

拠点を作ると上下の関係（ヒエラルキー）を作ることになりかねない。1つの事業やイベント等、ある1つのテーマ性を持ったことの中で一番上にくる拠点はあっても良いが、それが固定化するのは良くなくて、この事業の場合はここが拠点となる、例えば子育ての関係者が集まる時の地域の拠点はここ、〇〇の時の拠点は地域センター、等とあるべきなので、そういう意味ではヒエラルキーみたいに考えないほうがよい。情報拠点というか、地域内の情報がそこに行くとき集まっている、あるいは相談やカウンセリング等困ったことがあったらそこに行くという拠点等、上下関係を作らない、フラットな拠点の方が良いと思う。例えば、次世代育成は学校等にやってもらう等、柔軟に考えたほうが良い。

【中村副議長】 ということは、配置と機能を少し別々に考える必要もあるということか。例えば配置で中心を作るよりも、情報として集まっている必要はあるかもしれないが、ヒエラルキーではないということか。

【笹井委員】 拠点施設というと、A施設、B施設と決める必要があると思うが、すべての拠点をその1つの施設にするのではなく、テーマを持った事業ごとイベントごとに拠点施設を決める。なんでも1つの施設を中心にするのではなく、そこは柔軟にやり方を考えたほうが良いと思う。

【木村議長】 一応そうやっているが、例えば“明日会合をやるから会議室を使いたい”と思っても部屋が空いていないこともあり、どこに行ったら良いか分からなくなる。そういう時のためにも自分たちがいつでも使える会議室があることが必要だと思う。地域センターはいろいろな人が利用するので、自分たちが使いたいときには会議室が取れない。そうすると会議の話でまず始まるのが、拠点がいる、場所と言えば小学校が良いという話である。自分たちがいつでも使えるところがあればそんな問題はないが、地域センターも3か月前からインターネットで予約できるので、例えば“来月会議をやる”と思っても、会議室が空いておらず取れない。そのため誰が使っても問題のない拠点とすると、自分たちの地域等限られた中の拠点、自治会であったり消防団であったり地域の団体が利用でき、一般の人が入ってこない拠点があると良いと思った。

【深野委員】 「2(2) 目指す学び」で人を育てる話を書いてあり、ソフトをどうするかと中村副議長がご発言されていたが、確かに「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」とのつながりがないと感じる。拠点の話しか書いていないが、人を育てることとどうつなげるか。例えばの話だが、26の自治会連合会の地域コミュニティ組織の代表委員を選出し、まずその人たちを育てる。育てた人たちが議論する中で各自の拠点をどこにするかを議論してもらおう。そういうような議論の仕方をしないと、いくら一時的に拠点を議論しても、やはり地域性や歴史、規模に違いがあるので難しいと思う。人を育てるのが先であり、その人が核となってまた拠点で人を育てる、そういう循環を作っていないことには継続性とつながりが生まれてこない。拠点づくりよりも人づくりが先ではないか。そのプログラムを「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」で先に打ち出してもらったほうがわかりやすく納得感がある。ただ、そういう人をどうやって選び出すのか等が課題になると思うが。

【木村議長】 トップを作るのは大変である。自らやると言う人はほとんどいないし、そういう人は変な方向に行ってしまうことが多く、うまくいかない。現在、22の地区で地域コミュニティ組織が立ち上がっているが、トップは自治会連合会や社会福祉協議会が仕切っているところが多い。地域性で誰がトップになっても良いが、一番のネックはいろいろな仕事があることで、昔の自治会連合会長は仕事が少なく楽だったが、今は小間使いとかいろいろな仕事があるので昔の人と全然違う。それを皆聞いて知っているのに、なかなかトップをやってくれる人はいない。本当は深野委員がご発言されたような形で立ち上げ、自分たちで拠点を考えてもらうのが良いが、そこまで行くのが難しい。その辺りをどう答申に盛り込むかも難しいが。

【笹井委員】 今の議論は根本的な問題提起だと思う。それで、どこを切り口にするかで大きく変わる。

人づくりは、コーディネーターやリーダーを育てること、地域住民全体の底上げという切り口であるが、今の段階では学びの場のあり方ということで施設とか拠点という切り口できているので、そういう切り口で論旨や文章を進めていけば、例えば、地域の情報を収集する場、学び合う場、つながりの場等、場としての機能で全体の論旨に基づいて「3. 地域における学びの場のあり方」を整理し直すと、〇〇の場、〇〇の場というふうに場の持つ機能を少し具体的に書いていき、その機能を充実させるためにどうすれば良いかを考え、最終的にネットワーク化、拠点化するという流れになるのかなと思う。

場のあり方という切り口ならば、そうなる。

【深野委員】 確かに、タイトルが「地域における学びの場のあり方」となっている。

【中村副議長】 「はじめに」で学びの意味や定義を相当きちんと書くことと、最後の「おわりに」で何を一番言いたいのかだと思う。

場のあり方として、どちらかと言うと「3. 地域における学びの場のあり方」を最後にもってくるほうが良いのかなという気がした。社会教育施設の今後の方向性というよりも、場があるからこそ、それを社会教育施設としてどうやっていくか。構造というか筋を変える必要があるのかなと思った。

場のあり方とするならば、社会教育委員会議として何を一番言いたいかが重要になると思う。例えば、地域における学びの場のあり方について、という答申だと思うが、そこで何を一番言いたいのか。もし副題を付けるとしたら何なのかが重要だと思う。

【生涯学習課長】 「3. 地域における学びの場のあり方」と「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」の入れ替えは1つの考えとしてあると思うが、今回作らせていただいた答申の骨子案の基本的な考え方は、まず3で、こういう場が必要、こういう場が必要というのを洗い出した後、それぞれが小田原市の現状や地域の特性を踏まえた中で、どういうところに当てはめていくのが一番良いのかということで、4を作っている。流れとしてはそういうイメージである。

あるいは、3のあり方がそれぞれこういう場、こういう場としてあれば、市としてはこうやっていくのが良いのではないかという形で組み立てているつもりなので、逆にするというのも考え方としてあるかもしれないが、一応今のところはこういう考えで作っているとご理解いただきたい。

笹井委員のご発言にあった縁側や無目的という言葉はキーワードになるかなと思った。縁側は学ぶためではなくただ集まるための場だが、それがひいては学びにつながるかもしれないものとして、そういう意味では有効な考え方だと思う。例えば、環境や防災や福祉等もすべて学びにつながるので生涯学習がすべてを網羅しなければならないところにきており、そうすると学びは際限なく広がってしまい書きようがなくなってしまうので、今回はあくまで前回の答申をふまえた次の段階として、学びの場ということで諮問させていただいている。生涯学習とまちづくりはボーダーレス化し境目がない状態であり、どこまでを生涯学習課がやり、どこまでを地域政策課がやるか等、せめぎあいのような状態がどこの自治体でも起きている。逆に言うと、そういった中でそれを1つにできる、1つにしなければいけない時代にきている。経済的な面でもそうだし、市民からも、どっちがどっちか分かりにくいと言われている中で、小田原市の現状や特性を踏まえて、ボーダーレス化の時代の中で場というのは、特にハードとしてはどうしていくのかという1つの方向性を示していただきたいと考えている。

【深野委員】 場は会場や施設という意味ではない。ここ2年ほど震災の体験をいろいろな場所で話しているが、結局語る場所はどこでも良い。場というのは、私は機会だと思う。人と人とが接する機会が生まれるところ、そういう時間

帯が場だと思う。それは空間的に、その時に適している場なら会場はどこでも良いということである。そのため場のあり方というのを単に「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」と定義してしまうと、ハードウェアの話になってしまう。そうではなくて、人と人とが会う機会を場と定義すれば、それをどういうふうにして作っていくのかというテーマ設計の話にガラッと変わってしまうと思う。「3. 地域における学びの場のあり方」があくまでも場のあり方ということの答申案になるのかなと思うので、それを4で社会教育施設の今後の方向性とやってしまうとまとめにならない。4は1つの項目として必要なものであり、要素に過ぎないのではないかと感じた。

【木村議長】 どこでもできるならそれが一番良いが、できないから拠点が欲しいという話になる。

富水地区には各種の団体が合わせて13、14団体あり、その団体が1か月に1度使いたいとなると、そこに一般の人も入ってくるのでなかなか場が取れない。そのため、できれば自分たちがいつでも利用できる場、会場が欲しいという話が出てくる。たとえば空き家対策として自治会連合会で土地代を払うので利用したいという話もあり、そうなってくると小田原市もこれから高齢化になってきて空き家対策が必要になってくると思うので、そういった時に地区公民館がない地域や古くなっているところで代替施設という形でやっていきたい。そうすれば自分たちの場、集まる場所ができてくる。誰でも利用できるという形も考えなければいけないのかなと模索はしている。

いろいろなやり方があるが、どこか核になるところがやはり必要である。そのあたりも踏まえて事務局の方で答申案を練ってもらいたい。

【生涯学習課長】 前々回のときに答申の作成イメージを出すにあたり、ソフトとハードの2面からアプローチしたいと説明したところ、その間のつなぎの部分が必要であるということで新しいアプローチ方法を述べさせていただき、整理させていただいて、答申の骨子案をつくらせてもらった。その中で「3. 地域における学びの場のあり方」がソフトで、「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」がハードのことだと考えている。ハードの方が具体的に書いてあるのに対し、ソフトの方が概論や理念的な話に終わっている感じは確かにあるので、その辺りは今後、答申文を作っていく中でバランスを考え、ソフトについてももう少しバランスを取って追記する等して、書き直す予定である。

【木村議長】 次回の会議では話し合いはできるのか。

【生涯学習課長】 スケジュール上は答申文案を出させていただいて、お諮りいただくという予定である。そのため、次回までの間に内容についてやりとりをさせていただきたいと考えている。

【木村議長】 議論の時間がないということなので、とりあえず答申の骨子案を作っても

らい、それを各委員に送ってもらって、そこでやりとりをするしかない。そこで出た委員の意見がすべて反映できるかと言えば、そこまですぐうまくいかないだろうから、そのあたりをどうするかである。

【生涯学習課長】 前提としては、基本的に今日お示ししたものについて、要素というか内容に過不足やおかしいところがないかを今ここで言ってもらい、順番等の見直しは当然あると思うが、特に変更がなければ基本的にこの項目や中身で、それをもとに肉づけをして答申の文章にして良いかという確認だけは今日お願いしたいと考えている。

【木村議長】 ではこの骨子案で了承をいただけるか。

【中村副議長】 ハードとソフトという言い方だと、ご発言のとおりつなぎの部分がすごく重要になってくるのでそれをどう書くかであり、また「おわりに」をどうもってくるのがすごく大事である。そこを議論しておかないと難しい。

【生涯学習課長】 提案だが、例えば「おわりに」のところでそのつなぎの部分がある程度具体的に書くというのはどうか。

【中村副議長】 「おわりに」に書くと、だいたい今後の課題になってしまう。場のあり方について書かないのか。

【生涯学習課長】 場のあり方について、ソフトとハードとつなぎの部分は、今のところ答申全体に含めているので、個別の項目としてつなぎのところをどこまで書けるかだと思うが。

【中村副議長】 終わりには今まで出てきたことのまとめなので、基本的に前に出てきてないことは書けない。そうすると今後の課題として書くしかなくなってしまふ。この答申でどこまで書くかということなのだが、政策に落とし込めるような内容にしないといけないと考えると、ハードについては拠点を作っていくことが政策になっていくと思うが、それだけで良いのか。それをどう見せていくか難しい気がする。

【生涯学習課長】 「2（2）目指す学び」で、“人や活動をつなげる”、“人を育てる”と述べているが、そこでつなぎの部分を具体的に書くというのはどうか。

【笹井委員】 「場」は物理的なスペースという意味と、そこで行われる諸活動やコミュニケーション等の営みを含んでいると思う。そのため場と言った以上、初めからソフト・ハードの両方を含んでいる。それが議論が混乱した原因かなと思う。

個人的な意見だが、「3. 地域における学びの場のあり方」が答申のコアになると思うので、その中で項目ごとにソフトを書いてそれに見合うハード、施設のあり方を書くのはどうか。例えば「3（2）学習へのアクセスを広げる」というのはすごくハードに結び付けやすい。皆にアクセスしてもらうには、例えばバリアフリーにするとか保育室を設ける等の方法がある。項目ごとにソフト・ハードどっちに重心があっても良いが、そういう整理の方法があるのではないか。最後のところは、これからの方向性、課題、展望等を書くまとまると思う。そうすると、3の項目を今日の議論

を踏まえてもう一度見直してもらい、その中でどちらに焦点を当てても良いがソフト・ハード両方を書くの良いのかなと思う。

- 【中村副議長】 そういう風に書けると良い。
- 【生涯学習課長】 つまり、「3. 地域における学びの場のあり方」と「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」を一緒にして整理し直し、それぞれの項目ごとにわかりやすくソフトとハードを書くということか。
- 【中村副議長】 それだと分かりやすいと思う。また、最初に学びの定義だけでなく、場の定義も書いておく必要がある。場というのはスペースだけではないことを最初に書いておけば、あとは具体的にどうしていくのかと続けられる気がした。
- 【木村議長】 それでは時間を過ぎてしまったが、本日議論したものをもう一度事務局で整理してもらい、これに沿ってハードとソフトとつぎなぎが書けるものは書いてもらい、「3. 地域における学びの場のあり方」と「4. 小田原市の社会教育施設の今後の方向性」を再考してもらって委員に送ってもらい意見を出すという方法で良いか。
- 【生涯学習課長】 それでお願いしたい。
- 【有賀委員】 1点お話ししたい。「3（5）次世代を育成する」の【仕掛け】“学校、地域、家庭が連携して子どもを見守り育てることが必要である”の具体例として、これまで継続的にお伝えしていた放課後子ども教室の開設について説明させていただく。放課後子ども教室は6月16日から始まり、今回は地域の回覧で回した資料をお持ちした。毎回40人程度の子供達が参加しており、低学年の参加が多い。退職後の先生がたが学習アドバイザーとして児童の学習支援を行っているが、予想以上の登録があり、スタッフ不足という課題を抱えている。市の予算も厳しい状況であるので、今後は地域ボランティアや学生ボランティア等をお願いしたり、教育実習生や教員を志望している学生にも声を掛けていく予定である。また学校の近隣に集会施設があり、毎月2回まちづくり委員会が中心となってお年寄りのかたを集め、集会を開いている。そこでのお年寄りのかたとの交流も考えている。また、放課後児童クラブとの連携も視野に入れて、子供達の安全安心な居場所づくりに向けて取り組んでいきたいと考えている。
- 【木村議長】 それでは、本日の議題はすべて終了した。最後に事務局から何かあるか。
- 【事務局】 2点連絡させていただく。1点目は第46回関東甲信越静社会教育研究大会について、本年度は群馬県前橋市で11月5日、6日に開催される。開催要項が事務局に届いているので、興味のある方は後ほど事務局までお越しいただきたい。2点目は次回の社会教育委員会議についてだが、11月を予定している。委員の皆さまには日程が決まり次第、通知を送らせていただく。
- 【木村議長】 それでは、本日の社会教育委員会議はこれをもって閉会とさせていただきます。お疲れ様でした。